

エディット・ピアフ 愛の讃歌

2007(平成19)年11月6日鑑賞(数島シネポップ)

★★★★



監督・脚本・脚色＝オリヴィエ・ダアン／出演＝マリオン・コティヤール／マノン・シュヴァリエ／ポリヌ・ビュルレ／ジャン＝ポール・ルーヴ／クロチルド・クロウ／カトリーヌ・アレグレ／エマニュエル・セニエ／シルヴィ・テステュー／ジェラルド・ドバルデュール／ジャン＝ピエール・マルタンズ／マルク・バルベ／パスカル・グレゴリー／カロリーヌ・シロル (ムービーアイ配給／2007年フランス、チェコ、イギリス合作映画／140分)

第2章

映画は俳優で観る！

……激動する時代の中、フランスで生まれたエディット・ピアフの波瀾万丈の人生は、結局孤独を嫌い、愛を求めたもの。そして、そんな中から生まれた魂の叫びが、『愛の讃歌』『バラ色の人生』そしてラストで歌いあげられる『水に流して』などの楽曲。『Ray／レイ』(04年)のジェイミー・フォックスを彷彿させる、フランス人女性マリオン・コティヤールの信じられないような熱演を見れば、「本年度アカデミー賞最有力！」が誇大広告でないことは明らか。少し嫌味なことを言えば、私としてはこの映画鑑賞を機会に、あなたには『ラ・マルセイエーズ』と『愛の讃歌』の歌詞をじっくり勉強してもらいたいと思うのだが……？

これがホントにあの女優……？

もともと女は化けるもの。そして女優は化け方のプロ。いくらそう自分を納得させようとしても、私にはこの映画でエディット・ピアフを演じた女優が、『プロヴァンスの贈りもの』(06年)でラッセル・クロウをやり込めていたあのフランス娘のマリオン・コティヤールとは到底思えない。また、この映画でマリオン・コティヤールは20歳から47歳までのピアフを演じているが、その落差の大きさにビックリさせられるはず。ピアフは1963年10月11日に47歳で死亡したが、若い時からの大酒飲みと晩年の麻薬そして4回にわたる交通事故の影響などで、実際の年齢よりさらに20歳くらい老けていたらしい。したがって、1975年生まれだから公開時32歳になる健康そのも

ののマリオン・コティヤールが、そんな老け役を演ずるのは難しいはずだが、彼女はそれを見事に演じきっている。

さらに驚くのは、プレスシートにはマリオン・コティヤールは身長169センチメートルと書かれているが、ホンモノのピアフは150センチメートルくらいだったらしい。いくら女優でも自分の身長を縮めることはできないが、それでも背中を丸め首を少し突き出したような姿勢をとることによって、いかにも小柄で頼りなさげなエディット・ピアフをスクリーン上に登場させているから、実にお見事。これだけエディット・ピアフの外見に成りきったうえで、マリオン・コティヤールは歌う時の表情はもちろん波乱にみちたエディット・ピアフの愛と挫折の日々を表現力豊かに演じきっている。これでは、アカデミー賞主演女優賞の呼び声がかからないはずがない……。

10歳の子供が『ラ・マルセイエーズ』を……

エディット・ピアフがバリのベルヴィル地区で生まれたのは1915年。時代は第1次世界大戦の真っ最中だ。ピアフの母親は自称アーティストだが、路上で歌を歌って日銭を稼ぐのがやっとというレベル。そして父親も大道芸人。

幼児期（5歳までのピアフをマノン・シュヴァリエ）を祖母のルイーズ（カトリーヌ・アレグレ）の経営する娼館で、娼婦のティティエヌ（エマニュエル・セニエ）らにかわいがられながら育ったピアフは、その後父親に引きとられると、サーカスを経ていつしか路上で歌うようになっていた（10歳までのピアフをポリヌ・ビュルレ）。その最初の舞台は、父親の下手なパフォーマンスに飽きた観客から、「女の子も何か芸を見せろ」と要求されたため。父親から「早く何かやれ！ 客が逃げてしまうぞ！」とせつつかれたピアフが、そこでとっさに歌ったのは何と『ラ・マルセイエーズ』、すなわちフランス国歌だ。ちなみに、この曲は劇団四季のミュージカル『レ・ミゼラブル』の中で何度も流れるし、オリンピックの国旗掲揚の際もフランス人選手が金メダルを取った時には流されるから、日本人もアメリカ国歌と並んで比較的よく知っているはず……？

10歳のピアフが声量豊かに堂々と歌うその声を聴いて私は思わず涙を流しそうになったが、それは歌声のすばらしさ以上にその選曲のため。平和、平和と叫ぶだけで、政治、外交、軍事の処理能力がどんどん低下している今ドキの日本人には、民主主義を闘いとるために血を流すという、このフランス国歌の歌詞の崇高さは全然わからない

いのでは……？ そしてそれは、岩谷時子訳の『愛の讃歌』を結婚式で幸せいっぱいの気持で歌っているノー天気な日本人と同じ……？

ちなみに、参考のため吉田進氏の『ラ・マルセイエーズ物語 国歌の成立と変容』（1994年・中央公論新書）から、何度もリフレインされるサビの部分の歌詞を引用すれば、それは次のとおり何とも過激なもの……。

「武器を取れ、市民諸君！／隊伍を整えよ！／進もう！進もう！／不浄な血が我々の畝溝に吸われんことを！」

人生は、出会いと別れのくり返し……

「人生は、出会いと別れのくり返し」というフレーズはたくさんの曲の歌詞として使われているが、美空ひばりが山口組三代目組長田岡一雄と出会い、その庇護の下に大きく成長したように、エディット・ピアフにも大きな出会いと別れが何度もあったことがこの映画を観ればよくわかる。その人生ドラマはあなた自身が映画を観る中で存分に味わってもらいたいが、ここでその登場人物だけを紹介すれば次のとおりだ。

第1はパリの路上で歌うピアフの才能を見抜いた、パリ市内の名門クラブ、ジュルニーズのオーナーであるルイ・ルプレ（ジェラルド・ドバルデュー）との出会い。「エディット・ガシオンはパツとしない」というルプレの提案によって彼女はピアフ（雀）という名に改められることに。

第2は著名な作詞・作曲家であるレイモン・アツ（マルク・バルベ）との出会い。ルプレと違ってレイモンは、ピアフに対して容赦ないレッスンを課したが、さてそれに対するピアフの反応は……？

第3はこの映画がメインとして描く、プロボクサーのマルセル・セルダン（ジャン＝ピエール・マルタンズ）との出会い。マルセルに恋いこがれる少女のようなピアフの姿をみると、これがあの図太く生きているエディット・ピアフと同じ人間かと思ってしまうほど……？

以上3人がメインだが、それ以外にも路上で歌っていた少女時代に支え合って生きてきた義姉妹のモモーヌ（シルヴィ・テステュー）やピアフの生涯唯一人のマネージャーであるルイ・バリエ（パスカル・グレゴリー）など大切な人がたくさん登場する。また、あの大女優で歌手のマレーネ・デートリッヒ（カロリーヌ・シロル）や詩人・劇作家・画家のジャン・コクトーなどもピアフの友人。これら多くの人々との出会い

と別れの中で、ピアフの人生のよろこびと苦悩が刻まれていき、それがあの歌声によってたくさんの楽曲として表現されることになったわけだ。

はじめて知ったあの歌の意味

歌が上手と自他共に認める人が歌う曲の定番が『愛の讃歌』と『マイウエイ』だが、注意しなければならないのは「また、あいつのあの歌か……」と嫌がられている面もあること……？ また、『愛の讃歌』は最近でこそ少なくなったが、ひと昔前は結婚式の定番曲……？

しかし、この映画を観ると、必ずしもこの曲は2人の門出を祝う結婚式にふさわしいものではないことがよくわかる。日本では越路吹雪、岩谷時子のコンビで結婚式にふさわしい歌詞がつけられているが、もともとはエディット・ピアフが最愛の恋人マルセルを恋いこがれている時に書いた歌詞は、次のようになりかなり過激なもの……？ 長文になるが、ネット情報による野内良三訳『レトリックと認識』（2000年・日本放送出版協会）をそのまま引用すれば次のとおりだ。

「青空が私たちの上に落ちてくるかもしれない／大地が崩れ去るかもしれない／そんなことはどうでもいいの、もしあなたが私を愛してくれれば／世の中のことなんてどうでもいい／私の朝が愛で満たされる限り／私の体があなたの手の下でふるえる限り／世間の大きな問題もどうでもいいの／ねえあなた あなたが私を愛していてくれるのですもの／私は世界の果てまで行ってもいい／髪を金髪に染めてもいい／あなたがそうしろと言うのなら／月を奪りに行ってもいい／大金を盗みに行ってもいい／もしあなたがそうしろと言うなら／祖国を売ってもいい／友達を捨ててもいい／愚かだと笑われていい／私は何でもするわ／あなたがそうしろと言うのなら／いつの日か人生が私からあなたを引き離し／あなたが死んで 私から遠くへ行ってしまうても／そんなことはどうでもいいの あなたが私を愛してくれれば／だってこの私も死ぬから／無限に広がる青空のなかで／私たちのために永遠が待っている／天国には何の問題もない／ねえあなた 私たちは愛し合っているのよ／神は愛し合っている人間を結び合わせてくれる」

しかもこの曲は、アメリカからパリへ駆けつけてくる飛行機が事故に遭いマルセルが死んでしまった後、その悲しみいっぱいの中で歌われたらしい。「あの歌」のフランス語の歌詞がそんな意味であり、そんな悲しみの中で歌われた曲だとはじめて知っ

てビックリ……。

伝記映画対決 その1——『エディット・ピアフ 愛の讃歌』vs.『Ray／レイ』

伝記映画の名作は数多いが、ジェイミー・フォックスがレイ・チャールズに扮した『Ray／レイ』（04年）は最高傑作の1つで、2005年にジェイミー・フォックスがアカデミー賞主演男優賞を受賞したもの。『Ray／レイ』が良かったのは、『愛さずにはいられない』をはじめ、私もよく知っている魅力的なレイ・チャールズの音楽がいっぱい散りばめられていたこと、波瀾万丈のレイの生き方にある。レイは、①女性問題、②薬問題、③所属会社問題等々でもめにもめ、波乱に満ちた人生を送ったが、すごいのは最後には12人の子供と21人の孫、5人の曾孫に恵まれるという人生をつつ走ったこと（『シネマルーム7』149頁参照）。

それに比べても、エディット・ピアフの①男問題、②薬問題は決して劣るものではない。つまり、①歌手イヴ・モンタンとの恋、ボクサーのマルセル・セルダンとの恋を含む数回の結婚や、②長い間の薬づけと10年以上モルヒネを打ち続けてきたためその身体はボロボロと聞くと、エディット・ピアフの波乱ぶりはレイ・チャールズ以上……？

他方、大きく異なるのはその晩年で、結果オーライで大往生を迎えたレイ・チャールズに比べてエディット・ピアフの晩年はかなりさびしいものに……。そんな対比を試みれば、エディット・ピアフの人生をより一層知ることができるとともに、彼女の歌の魅力はそれが源泉になっていたのだということをより一層理解できるのでは……？

伝記映画対決 その2——『エディット・ピアフ 愛の讃歌』vs.『永遠のマリア・カラス』

20世紀最大のソプラノ歌手マリア・カラスを描いた映画が『永遠のマリア・カラス』（02年）だった。しかし、これは生誕80周年を迎えたマリア・カラスを記念して、1974年11月11日の札幌厚生年金会館での日本公演を最後に引退したマリア・カラスが、歌劇『カルメン』の主演として再登場するという仮定の姿を描いた面白い企画だったから、厳密には伝記映画とはいえないもの（『シネマルーム3』189頁参照）。

その意味では両者の対比はナンセンスかもしれないが、この『永遠のマリア・カラス』と『エディット・ピアフ 愛の讃歌』との共通点は、両作品ともホンモノの歌声

を使っているということ。つまり、観客はその映画の中でマリア・カラスやエディット・ピアフの生きざまを観ることができるとともに、ホンモノの歌声を存分に聴くことができるというわけだ。

伝記映画対決 その3——『エディット・ピアフ 愛の讃歌』vs.『呉清源 極みの棋譜』

他方、音楽映画ではないが伝記映画として対比したいのが、9月25日に観た『呉清源 極みの棋譜』(06年)。これは、1928年に14歳で来日し、あの激動の時代に「昭和最強の棋士」の名を欲しいままにした天才呉清源の生きざまを描いたもの。格別ドラマティックな演出があるわけではなく、美しい映像の中に淡々と彼の生涯が描かれていっただけだから、ある意味では退屈かもしれないが、私には実に味わい深い映画だった。

それに比べると、『エディット・ピアフ 愛の讃歌』はオリヴィエ・ダアン監督がピアフの生きていた時代をスクリーン上で縦横無尽に動かし回るから、楽しいといえは楽しいが、それをきちんと追っていくのは結構大変……？ 伝記映画をつくるという共通目標であっても、監督の演出方針によってこれほどつくり方が違うものだということが、両者を対比すればよくわかるはず。

思わず、美空ひばりの晩年と対比したが……

フランス人が全員一致して20世紀を代表する女性歌手がエディット・ピアフだと言うのなら、日本人は全員一致で昭和を代表する歌姫として美空ひばりを挙げるはず。美空ひばりは1989年6月24日に52歳の若さで亡くなったから、47歳で亡くなったピアフより5歳長生きしただけ。美空ひばり、江利チエミ、雪村いづみの三人娘のうち今なお現役で活躍しているのは雪村いづみだけになってしまったわけだ。

日本は西欧社会ほどドラッグが浸透していないから、美空ひばりが麻薬に悩まされたという話は全く聞かないが、彼女の晩年は病魔との闘いで大変だったらしい。そんな中、1989年2月7日に九州厚生年金会館で開催された最後の美空ひばりのコンサートはすごい盛り上がりとなり大成功を取めたが、ピアフの最後(5回目)のオランピア劇場公演は1962年9月とのこと。

この映画は、オランピア劇場の大舞台でピアフが『水に流して』を歌いあげたところで終了する。この『水に流して』という曲は、『愛の讃歌』『バラ色の人生』と並ぶ

ピアフの代表曲で晩年に生まれた心にしみる名曲。それまでの人生を振り返りながら、「私は後悔しない」と歌うものだ。ちなみに、このステージは字幕で日本語訳が表示されるので、1番の歌詞だけここに記載しておこう。

「いいえ、ぜんぜん／いいえ、私は何も後悔していない／私が人にした良いことも、悪いことも／何もかも、私にとってはどうでもいいこと／いいえ、ぜんぜん／いいえ、私は何も後悔していない／私は代償を払った、清算した、そして忘れた／過去なんて、もうどうでもいい」

プロフェッショナルとしての最後の大舞台のつとめ方はピアフも美空ひばりも全く同じだということをこの映画を観て痛感させられるとともに、晩年は2人ともきつとさびしかったのだろうか、という同情の気持も……。

「アカデミー賞最有力！」は誇大広告にあらず！

遅ればせながら、見逃していた『エディット・ピアフ 愛の讃歌』をやっと観たが、新聞の広告には「本年度アカデミー賞最有力！」と書かれている。どんな根拠がある場合にこういう広告が打てるのか私にはよくわからないが、実際にこの映画を観て、この文句が誇大広告でないことを実感。作品賞、監督賞が最大の狙い目だろうが、私は主演女優賞の可能性が大とみたが……？

2007(平成19)年11月7日記

ミニコラム

坂和予想が大当たり！

第80回アカデミー賞主演女優賞の一般的予想は、①本命が『エリザベス：ゴールデン・エイジ』のケイト・ブランシェット、②対抗が『エディット・ピアフ 愛の讃歌』のマリオン・コティヤール、③大穴が『JUNO / ジュノ』のエレン・ペイジ？

そんな中、私はマリオンの「主演女優賞は大とみたが……？」と書いた。たしかにケイトの熱演はすばらしく、

女優としての卓抜した能力をみせつけたが、マリオンにはピアフ役になりきった鬼気迫るものがあった。もっとも、最終的には米仏対決はやはり米の勝ち、というのが大方の予想？

ところが、結果はマリオンがフランス語作品で初の主演女優賞を獲得し、見事に坂和予想が大当たり！

2008(平成20)年3月5日